

協同的な学習に対する動機づけとメタ認知的方略との関連

岡田 涼 (香川大学)

キーワード：メタ認知、動機づけ、小学生

問題と目的

学習を効率的に進めるうえで、メタ認知は重要である。多くの研究から、メタ認知が学業成績と関連することが明らかにされている (Ohtani & Hisasaka, 2018)。小学生においても、学習方略の1つであるメタ認知的方略は、学業成績につながる要因である (Dent & Koenka, 2016)。

メタ認知的方略は、仲間との学習活動のなかで身につけていく面がある。自己調整学習の社会的認知モデル (Zimmerman, 2000) では、メタ認知的方略を含む学習方略は、モデリングのなかで発達していくとしている。仲間との協同的な学習とメタ認知的方略との関連を示した実践研究もある (木下他, 2007; 高垣他, 2014)。

ただし、協同的な学習に取り組めば必ずメタ認知的方略が獲得されるわけではない。どのような動機づけで協同的な学習に取り組むかが重要であると考えられる。本研究では、協同的な学習に対する動機づけがメタ認知的方略に及ぼす影響について、2年間の縦断調査から検討する。

方 法

調査対象者

小学4, 5年生 114名 (男子 56名, 女子 58名)。

質問紙

メタ認知的方略として、佐藤・新井 (1998) の学習方略尺度の中からメタ認知的方略尺度 14項目を用いた。また、岡田 (2014) の協同的な学習に対する動機づけ尺度 12項目を用いた。いずれも4件法であった。

手続き

2年間にわたって年度内の5月, 11月, 2月に調査を実施した (T1~T6)。メタ認知的方略については6時点のデータを用い、動機づけについてはT1のデータのみを用いた。

結果と考察

尺度構成

メタ認知的方略尺度について探索的因子分析を行ったところ、固有値が 8.04, 1.06, 0.83 であったため、1因子解を採用した。時点ごとに14項目の得点の平均値を算出した ($\alpha = .89 \sim .94$)。協同的な学習に対する動機づけについて探索的因子分析を行ったところ、固有値が 4.81, 1.90, 1.05, 0.93 であったため、2因子解を採用した。2項目を削除した後、第1因子を自律的動機づけ (α

$= .90$)、第2因子を統制的動機づけ ($\alpha = .66$) とした。それぞれ項目得点の平均値を算出した。

協同的な学習に対する動機づけとメタ認知的方略との関連

メタ認知的方略の級内相関係数は.56であった。メタ認知的方略の初期値と変化に対して、協同的な学習に対する動機づけが及ぼす影響について、マルチレベルモデル分析を用いて検討した。レベル1では時点からの効果を想定し、レベル2では切片に対して、学年と2つの動機づけからの効果、時点からの傾きに対して2つの動機づけからの効果を想定した。また、時点間の得点の1次の自己相関を仮定した。その結果、レベル1では時点の効果が有意であった ($\gamma = .06, p < .001$)。レベル2では、切片に対して、学年 ($\gamma = .16, p < .05$) と自律的動機づけ ($\gamma = .52, p < .001$) の効果が有意であった。傾きに対する自律的動機づけの効果が有意であった ($\gamma = -.04, p < .05$; Figure 1)。

考 察

協同的な学習に対する自律的動機づけが高い児童は、メタ認知的方略が高いことが明らかにされた。仲間との協同的な学習に興味をもち、積極的にかかわろうとする児童は、メタ認知的方略を有していると考えられる。一方で、その差は時間とともに縮まっていた。その背景には、協同的な学習に対する動機づけ自体の変化の可能性が想定される。動機づけとメタ認知的方略の両面の変化を捉えたうえで、協同的な学習がメタ認知的方略の発達に及ぼす影響を明らかにする必要がある。

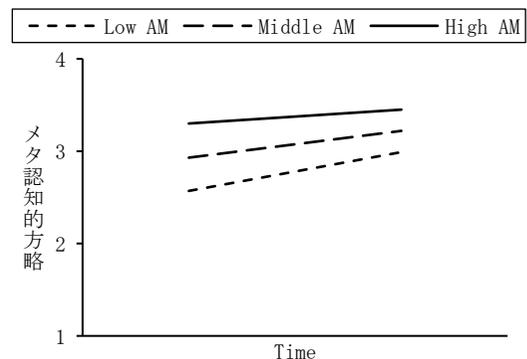


Figure 1 自律的動機づけとメタ認知との関連